戦後 80 年

～昭和の日に寄せて～

教育長　津野庄一郎

亡くなった祖父との思い出の一つが、背中の傷。聞けば先の大戦、昭和 12（1937）年、上海上陸の折り、敵の銃弾が胸部を貫通した痕跡だと言います。あと 1 センチずれていれば心臓に達して死んでいたとのこと。母の兄もまた昭和 18（1943）年、中国戦線で顔面に銃弾を受け、九死に一生を得たとのことです。

関川中学校の坂道の上関側に、立派な石塔が立っています。「忠魂碑」と言って、旧関谷村から戦争に行って亡くなった方々を顕彰・慰霊するため、大正 9（1920）年 10 月に建てられたものです。同様のものが女川の上野新の県道沿いにあり＜大正 7（1918）年秋建立＞、それらには関川村遺族会が建設した石碑が置かれ、従軍して亡くなられた方々の名前を刻んでいます。

明治から昭和にかけて、日本はおよそ 10 年おきに中国やロシア等と戦争をし、双方ともにかけがえのない命を落としてきました。戦後 80 年、日本は奇跡的な復興を遂げて、平和と豊かな暮らし手にしています。一方、世界に目を向ければ、今なおウクライナやパレスチナ等で激しい戦争が続き、家族や土地を失い、悲しみ苦しんでいる多くの人がいるという現実があります。

「体験はしたことはなくとも、戦争の悲惨さを、決して繰り返してはいけないことを伝え継いでいくことは、今に生きる私たちの使命だ」と少女は訴えました。（2019 年：沖縄全戦没者慰霊式典・糸満市立兼城小学校 6 年・山内玲奈さん）戦争の記憶が風化しつつある今、村に戦争があったということ、戦争は絶対にしてはいけないということを、後世に伝えていかなければと思うこの頃です。

＜【写真】旧関谷村（左）と旧女川村（右）の忠魂碑＞